西洋古代郵制の發達

三井高陽

一　序說

人類が既に言語を以て己の意志を發表し、更に其意志を傳ふるために文字を發明し、文字の發明と共に其文字を記すべき手段方法を創めたるは何時の頃なりしや、諸說紛々として未だ確說なし。而して人類生活の上に於て通信が片時も缺くべからざる重大なる使命を有せしは昔も今も異らず、たゞ今日にありては其方法の進步したるのみ。文化未開の世にありては幼稚なる手段を以てこれを果したるを以て、今日程の迅速と確實とを保し難かりしならんも、其昔吾々の祖先が如何に苦心せしや、蓋し測り知るべからざるものあらん。

吾人が今この郵制の沿革を究めんとするもの、其單に郵制そのもののみならず、亦他の歷史例へば軍事、外交、文學的の歷史と共に文化史上缺くべからざる要素なりと認むればなり。

郵制の發達の經路は一は支那に其起原を發し、我が邦に傳りて發達せし所謂飛脚傳馬の制度、一はエジプト、ペルシヤに起りてローマを經て歐洲に發達し後佛獨等に行はれし僧院騎手、騎士飛脚更にこれが統一されて全歐に擴りたるチユルン公家の大驛制より今日の萬國郵便聯合に及べるものを主なるものとす。其他南米マヤ朝の文化史、未開の裡にも其獨特の制を有する印度、アフリカの通信制度等ありと雖も要するに今日世界を打つて一丸とせる大通信網萬國郵便聯合なるものが歐洲

に其基を發せる點に於て、吾人は先づ歐洲の古代郵制より究むるを順序と思考す。これ文化史の一部門として重要なる意義を有すればなり。

二　古代諸邦の郵制

アッシリア、バビロニアの昔、未開の時代にも既に文書の授受に相當の機關ありしものの如く、縱し飛脚と稱するが如き特殊の專門の機關職業の備はりしや否やは不明なりとはいへ、アッシリアのセミラミス女王の時發達せし文書をグラムマタと稱し（Grammata）遞送せられたる文書の古き例として一般に認めらる。然れども最も古代にありて文明の華なるを誇りとせし埃及にありては更にこれが進歩したるものの存せるを認めずんばあらず。

ジオドロス　シクルスに從へば「王は朝醒めと共に各地よりの書翰を閲せらる」とあり、すでに信書の集散の整ひたるもののありしを見る。紀元前一五〇〇年前アメンホテプ（Amenhotep）二世王の時の壁畫にも信者を使者に托せし樣を示せり又ミネプタ（Mineptah）二世（紀元前一三〇〇年）の時にパピラスを以て作れる飛脚者名簿存せりと云ふ。以て相當の設備のありしを窺ふに足らんか。

紀元前一八〇〇年頃パピラスの草より其皮を取りて制せるパピラスなる一種の紙を發明せり。其目的は文書記錄の用に供せらる。これ當時の書狀帳簿の現存するものによりて明にして、他の民族に比してエジプトがすべての文明の施設に於て勝れる一の表現なり。

パピラスは古代埃及に於ける文書作成上極めて重要なる意義を有せるものなり。今獨逸伯林國立遞信博物館所藏の古文書につきて其れが古代埃及の郵書として如何に使用されたるかを紹介すべし。

當該博物館所藏のパピラスは紀元前二百七十年

の頃のものにして、中央エジプトの東南フエユン(Fayûn)に於て行使されたる文書なり。この文書によりて吾々はフエニクス(Phönix)なる人名を發見す、彼が一年間禮拜式係官として在任せし時の記錄なり。

この禮拜式卽ちフローネは當時頗る重大なる儀禮にしてこの禮拜式に關するすべての勞役は大地主に對する義務勞役として其地主の所有する土地に所屬の人民が課せられたる重大なる負擔なり。彼等勞役に從ふ人民はそれに要するすべての費用を自ら負ひたり、彼れフエニクスも亦記錄係としての役目を果すに要せる墨汁及パピラス等は彼の自辨にして彼自らは出來るだけ節約せざるべからず、これこの文書が地主其他に對する公文書の不要になりしものゝ裏面を記錄ノートとして使用せるにても知らる。かくして初めてこのパピラスのおろされしより手翰、揭

示等の用を果して後も記錄用として使用せられ彼が偶然手記せる驛馬の發着の表(リスト)が當時の埃及の驛制を知る一資料となりたるなり。この反古利用によりて一枚のパピラスが不要品として棄てらるゝ迄約五十年も使用され得と云へり。(因に、不用廢棄のパピラスは木乃伊を收めたる內棺の內張りに使用せらる。)

右フエニクスが記せる文書によりて明に當時の驛制を知る、例へばこの文書の一部に郵便物の發着日附と遞送者の名等を判讀すべし。例へば「十八日午前六時　南より郵遞手テオクレストス着す受附ヂニアス。ヂニアス次の郵遞手ヒポリソスに渡す。ヒポリソス更に北行」とあり、

右記錄には書狀束數及名宛人名を記しあり、名宛人名中には國王プトレメウスの名も見ゆ。扨北行せる郵便物は主として公文書にして每回少くとも一通の王の親書等重要なるものあり、

其他大臣等の書翰ありし由見ゆ。北より南へ向ふ文書は八日を要せり、即ち右文書に或る月の十六日發して二十三日に着せる旨記されあるを見る、而して當時の卷書を xuuoto's キリオトスと稱す、これ書翰を指せる當時の稱呼なり。此文書によりて八日間に四十の卷書狀と二通の折書狀を配送せしことを知る。然れどもこは官用の所謂公にし得る配達數にして其間私に混せし書狀なきを保せず、これ幾多の史家が推論する處なり。

此記錄及び其他歐洲各國の郵便博物館の所藏する文書等によりて脚力による所謂飛脚、船便、駱駝、騾馬等各種の機關を利用せしことを知る而してアレキサンドリアを中心として南方へと道を開きこゝに定期の飛脚を創めデルタに於て更に分岐點を出し、又一つはカイロよりフアユンに向ひて南行す。されば埃及の驛路は單純に南行北行と指されたるのみにて足れり。

而して當時の驛の事務は如何にして執行せられたるかと云ふに、例へば一定の線に勤むる騎手ありとせん、第一番の騎手はA驛よりB驛に走り、郵便物をB驛にて下す、B驛より第二番騎手これを受取りC驛に行く其間に第一番騎手は一定の休息後A驛に戻る、勿論右第一騎手はB驛よりA驛に齎すべき郵便物を携ふ、一人の騎手は二日目に出發、二日目に歸ることを定めらる。而して右文書に其例を見るに、文中テオクレストスなる騎手あり、某月十七日朝早く南行し二十日に北行す。然も時には一日一人と限らず數回に亙りて必要に應じて發遣せらる同文書中には一日三回、朝六時、正午、夕六時の三回に亙りて發遣せられしことも見ゆ。今これを表示するに左の如し。

かゝる正規的なる時間割によりて行はれたる當

方向	A驛	B驛	C驛	D驛	E驛	F驛
	正午12時	夕方 6時	夜半12時	午前 6時	正午12時	夕 6時
	夕 6時	夜半12時	午前 6時	正午12時	夕 6時	夜半12時
	夜半12時	午前 6時	正午12時	夕 6時	夜半12時	午前 6時

時は南行北行の騎手が驛にて出會ふのも亦時を同うすべき原則なりき。

人の脚力によるものは埃及に於て早くより發達し壁畫、古陶等に示されたるものは主として脚力の利用によりて專ら其目的を達せしものの如きも馬を利用すること未だ後年のペルシアに及ばず、騎馬による遞送は殆んどペルシャの創始と云つて可なるべし。卽ちエジプトにては急を要する官用便に馬を用ひたるのみ。

紀元前千六十四年ダビデ王の治下にありしヘブライ人中當時王に直屬せし飛脚（王親衞兵より選拔す）の速なりしこと又著る。これ飛脚の古き實例として史家の引くところなり。聖書に一〇四六年の頃ザウル(Saul)の治下にありては脚走者と稱し、かゝる飛脚が王侯及知事代官に宛てゝ書かれ、又は民族の酋長より民族へ宛てて書かれたることそれが脚走者により配達せられしこと見ゆ。猶ほ聖書にはユダヤ族、モール族等にも騾馬、馬、駱駝を用ひしことを記せり。

ユダヤ民族の國家はヘブライ族のザウルの後をうけて其飛脚を進歩せしめ、ダビッド、ソロモン等の治下にありては道路の修築等の工事盛んなりしかば驛制大いに整ひ飛脚は一日二十猶太哩（一猶太哩は英哩一哩强なれば二十猶太哩は約二十二英哩半に當る）を走るを平均とし、日曜は二チエレン卽ち一ユダヤ哩を走れるに止れり。これが賃銀は一日につき二十ゲラ乃至一シェケル(Schekel)を支拂ふ。（一シェケルは銀環なり。其價は一八三二年の普魯西の半タラーに相當す、二

十ゲラは半シェケルに當る）猶シェケルの他にもゲラ(Gera)と稱する貨幣をも支拂へり。

アッシリアの滅亡後獨立せる小六國の中メデアの國の國王アストヤジエス（紀前五九三—五五〇）の治世當時騎馬飛脚を常備し又驛をも用ひしこと記錄に見ゆ。其後紀元前五五八年ペルシャのキルス、メデアに叛き、アストヤジエス敗北し、ここにメデア滅亡し、キルスはペルシャ國王として其國土と郵制を己の手に收め、ここにペルシャによりて郵制の面目一新するに至れり。

三　波斯の郵制

キルス Cyrus（即位紀元五五九—五二九 歿）はメデア國王アストヤジヤスを滅し、波斯國王となりてより鋭意國土を擴張し、又これに伴ひ軍用の目的の爲めに通信制度の完備を急ぎたり。クセノフオン、ヘロドドス等は彼の治世下に於ける飛脚の迅速なることを賞揚せり。當時波斯の國土は益擴大し各新領土の人民の壓服に頗る苦心し、動もすれば叛亂を惹起するの虞あり、これが統治のためには速に情報を中央政府に捕捉するの必要ありしを以て自然通信制度の改良發達に留意するに至れり。

キルスの歿後混亂せる國内を治め、自ら王となりし王族ダリウスは、即ちダリウス一世として有名なるペルシャの郵制の始祖として知らる。ダリウス一世の内治方針は全領土を二十縣に分ち各縣に知事(Satrap)を派遣し、大概キルスの舊制を襲ひ、軍用並に統治上の目的を以て道路を築きて驛傳の制を備へたり。(註1)アンガリウス(Angarius)は實にこのダリウス一世の創始せし郵制の稱にして、一般に飛脚の勞役及驛馬提供義務を指すものと解せられ、佛國の郵便史家ヌフビル (Neufville) 氏は其著「郵便之起原」(一七〇八年)にかゝる解釋を與へ獨逸のボイスト氏は更に驛馬夫自身及勞役共にアンガリウスなりと廣く解せり。

（註）希臘語アンガレオン ἀγγαρεῖον 羅甸語 Angaria 飛脚者 Angaros 飛脚役所 Angaria 又 Angara とはこの勞役にあるものを指し、又一日の走行そのものを指す場合もあり。）このアンガリウスは紀元前五五〇年の頃よりすでに始められたりしを、ダリウス一世によりて大成せられしものにして、騎馬飛脚と脚走飛脚と共に存せしも騎馬を利用すること盛なりき。（註1）而してこは國家の官營にしてこれに從ふものは官吏にして人馬繼替徵募の强制權を有す。これが飛脚の任にあるものは王の親衞兵より拔擢せられ、宮廷より知事へ宛てて急速なる驛馬を走らすことは最も重要なる仕事にして其送達に要する時間の正確と各都市間の連絡の完備とには非常なる注意を拂ひしものなりと言ふ。或る書（註2）に私信は主として駱駝によれりと記せるも其眞僞未だ明ならず。

（註1）聖書舊約 Esther Cap. 3 v. 13. 8 v. 10 （註2）Faulman, W. Cultur Geschicht, Wien.

アンガリウスの別名をアスタンデエ（Astandae）

と稱す。これプルータック、クルチウス等の史家が最初己の崇拜するアレキサンダーを奪くせんがために、ペルシア最後の王たるダリウス三世（コドマヌス）を卑しみて其前身が脚走飛脚卽ちアスタンダなりしを以て、彼のことをアスタンデーと稱し、後に其意義轉じて飛脚役所の稱として用ひらるゝに至れるなり。然れども諸家の考說に從へば、ダリウス三世を以て脚走者が王位を簒奪せしと云ふは誤りにて當時ペルシャ宮廷の事情を見れば、廷臣ボアスの手にて王統全部殺戮せられ、位につくべき最も近きものはダリウス三世卽ちコドマヌスより他に其人なかりしなり。（註）

（註）Mathius Regal I. 40

彼はボアス及び知事等に擁されて位につきたる者なるが其身分は王家の血を享けし人なり、彼はアルメニアの知事たりしアルタキセルクセスの子にして身分卑しき者に非ず、波斯希臘の間に戰爭

起るやダリウス一世は大軍を派して轉戰せしも、事志と違ひ、空しく紀元前四八五年病歿せり、ダリウスの歿後次王クセルクセス（前四八五即位四六五）の時に紀元前四八〇年再び軍帥を起し、自ら陣頭に立ち初め軍況甚だ有利なりしも、サラミスの海戰に海軍敗れしが、この時敗報をスーザ（今の伊太利北西部）に報ぜしはアンガリウスなりき。これ古代史上稀に見る長路の飛脚にして、勿論繼馬の取替せし數幾許なりしや計るべからず。

紀元前四五〇年頃すでに今日　伊太利のチユーリン地方なるスーザ及び小亞細亞のザルデス間に二千五百キロメートルの長き驛路あり、この驛路に正しき間隔を以て驛舍を設く、尤も地勢により其間隔に多少の差あれど大體平均せり、一日の行程を標準として驛舍を設け各々に王有の馬及騾馬を備ふ。この驛をヤーム（Jam）と稱す。ヤームは驛馬の繼替と旅人飛脚の休息所として使用せられ其間隔は一日の馬の脚力と所要時間を以て計出す其受授にあたりては第一の驛舍に信書を齎し、騎手は直ちに次驛まで騎行し、次の騎手は新たなる馬にて次の驛に至る。かくして繼替を重ねて目的地に至る。勿論これが利用は官用に止れり。各驛間の距離については諸説あり、ヘロドトスによれば、英十四哩とあり、ハルトマンに從へば、各驛間は三乃至五パラザンガ Parasang にして、一パラザンガは三十スタヂウム Stadium に分つ、一スタヂウムは英哩にて四哩なり、今日のペルシヤにてフアルサンケ Farsang と云ふ。一スタヂウムは百二十五パススPassus にして今日の獨哩（七五〇〇米）にて一哩は四千パススなれば各驛間は三獨哩3/4の割合なり。寒暑日夜の區別なく頗る正確に右の飛脚は行はれたり。ヤーン氏の聖書考にも其驛舍の宏莊なるを記せり。當時の平均速力は一時間十七キロメーターなりといはれ、「速なること鳩の

如く早きこと鶴の如し」と稱せらる。

此ヤームの備は、ヘロドトス其他はクセルクセス王によりて設けられし如く云はれ諸家亦これに從へり、然れどもクセノフォン獨りこれに反對し、

（註）キロスを以て創始者とせり。

（註）Cyropaed VII. 6. § 17

「キロス王は其廣大なる領土内に於てあらゆる遠距離の各地よりの通信をも集め得ることとせり、而して馬が其走行に際し飼料を與へるに必要なる時間を測定し、それによりて距離を定めて驛舍を設け、こゝにて繼馬を得て進む」と、ハルトマンの如きもむしろキロスを以て創始者とし、クセルクセスにより改良せられたるかの感を有せるに似たり。

當時の通信は主として文書なりしも又口頭を以てせしことも少なからざりしといふ。卽ち文書に記し能はざる煩はしき用件報道は口頭傳達 Rufpost の方法にも依れり。又文書に記するものは主として絹布を用ふと雖も、この他に瓦板 Ton Tafel をも使用す。一九〇五年アッシリアの遺跡より多數の瓦板を發見したればアッシリア以降この方法の傳りしものなるべしと郵史家スタキー氏は云へり。これは硬質の瓦に金屬を以て刻みたるものにして、祕密を要するものは瓦製の蓋を備ふ。

これを要するに、ペルシャの郵制は終始國王の專制政治下にありて、たゞ統治上、政治、軍事の目的を主とせしものにして今日の郵便とは全く意味を異にするものと解すべきは論を俟たず。

四　希臘の郵制

波斯が其盛なりし頃、百般の文物完備してアンガリウスの制を布きたるに對し、波斯を滅してこれに代れる希臘は又其飛脚主として足力によるヘメロドロメン（Hemerodromen）を以て史上に其文化施設を永く記錄せり。

ヘメロドロメンはギリシア勃興の始めにあたりすでに小都ヘラス Hellas に於て布きたる郵制に其因を發す。ヘメロドロメンに從ふ脚力旺盛なる脚走者はオリンピア、イストモス、ネメア等の競技にも其優秀なる脚力を示し、例へばフエロニデス、フイリピデスなど云ふ健脚家は脚力頗る早くアイリピデスは嘗てアテネより英九十哩離りし處迄を二十四時にて走れりと傳へらる。

ギリシアが交通制度に意を用ひるに至りて、其最も力をつくしたるは、マセドニア朝を以て始とす。卽ちアレキサンダー大王の大ギリシア帝國の理想に燃ゆる時にして、キリスト紀元前三三〇年頃より、アレキサンデル崩後一時支配せしヂアトケン將軍及び元ペルシア國ビルギエン州總督たりしアンチゴヌスはペルシアの制を專ら襲用し、アンチゴヌスは主としてラクダを用ひたり。

普通の脚走者をドロメクリユケス (Dromekehrükes) 急飛脚をヂアドホイ (Diadochoi) と稱す。飛脚の役所をドロメス (Dromehma) 驛をアンガラと

稱せり。これペルシアに其範を取りしためにして飛脚發遣の事柄をアンガレウス (Angareus) 發遣者をアンガロイステースと稱せるはいづれも同じ。

當時の飛脚が齎したる信書等は如何なる形にて作られたるか、これペルシアと大差なきものなりしも、往々書信の內容を盜見するものありしかば符牒、又は獨特の符合法を以て內容の漏洩を防げり、これ卽ち棒書狀又は生手紙なり。棒書狀と稱するものは、細き紐狀の羊皮紙又はパピルス、絹

等を棒に結着せしめ、この紐狀の紙又は布片に文句を記し、多數のこの紐狀の紙布片を捧に卷きて傳達す。受取人はこの紐狀の紙布片を或る順序に並列して語をつゞりて判讀し、讀後は再び混ぜ返して他人をして讀ましめざるものなり。生手紙(イキ)は左程頻繁に行はれたりとは信ぜられざるも兎に角當時の珍通信法として行はれたるもの、卽ち奴隷の頭を剃りてこれに文句を記し、毛の生えたる時發送すると云ふものにして、勿論急速を要する通信に使用し能はざりしは論を俟たざるところなり

ペルシヤが其覇權をローマに讓るに及び、大ローマは如何にして其通信法を繼承しこれを擴大したるか、世界に不朽の名を止めたるは獨りローマ法典のみにあらず、ユリウスシーザーのみにあらずブルータークのみにあらず實に亦今日世界郵便の核子たる驛制クルスプブリクスのありたることを忘るべからず。

而してローマの郵制は他日稿を改めて說くところあらん。

(一九二七、一、一二、於伯林)